『源氏物語』の「春の光」

――歌語と詩語からもたらされるもの――

桑原　もと子

はじめに

幻巻は、年が改まってもなお悲嘆に暮れる光源氏を描き出して始まる。これまで、紫の上を哀傷する光源氏を照らし出す新春の陽光の明るさは、光源氏の悲しみの深さを際立たせる景物の一つとして理解されてきた。

また、早蕨の巻の冒頭にも幻巻と同様に「春の光」が描かれている。後述するように、二つの巻の冒頭部に深い関連があることについては、すでに指摘がある。しかし、「春の光」という一つの言葉に注目することで、それぞれの巻を新たに読み直すことができないだろうか。この「春の光」という言葉は胡蝶の巻に最初に現れたもので、六条院の栄華を表していると考えられる。つまり、物語のうちに合計三度見られるのだが、これらすべてに繋がる意味、さらにはこの言葉独自の方法については、まだ言及されていないようである。むしろ一見質を異にする胡蝶巻に初めて現れることに意味を見出してみたい。そして、幻巻と早蕨巻からとらえられる「春の光」の意味を、胡蝶巻でのあり方と合わせて検討することとする。そのことによって、光源氏が築き上げ、そして終焉へと向かうことになる世界がどのようなものであったかを位置付けることができると思われる。

そこで、「春の光」が意味するものを、和歌の表現を通して考察する。「春」と「光」が組み合わされて詠まれる和歌まで考えることで、この言葉の持つ意味を明らかにする。また一方で、漢詩文にみられる「春光」という言葉についても、和歌の表現との関連について考える。『源氏物語』で「春の光」という表現が選ばれた必然について考えたい。

一、

それでは、『源氏物語』にみられる三例について、それぞれの問題を具体的に考える。

胡蝶の巻には、六条院の春の盛りが語られる。船楽が催され、夜になっても唐めいた様の興趣の限りが尽くされて、人々はそのまま遊び明かす。翌朝もなお、春の町には遊宴の声が響いていた。

夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥の囀を、中宮は、物隔ててねたう聞こしめしけり。いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど、心をつくるよすがのまたなきを、飽かぬことに思す人々もありけるに、西の対の姫君、事もなき御ありさま、大臣の君も、わざと思しあがめきこえたまふ御気色など、みな世に聞こえ出でて、思ししもしるく、心なびかしたまふ人多かるべし。

（三巻、胡蝶、一六九頁）[1]

これはあくまでも「三月の二十日あまりのころほひ」（三巻、胡蝶、一六五頁）の、暮春のことであり、新春ではない。この町だけに春の盛りが続くことが珍しがられるほどの時期なのだ。幻巻と早蕨巻での「春の光」とは、まるで掛け離れたもののように見える。季節も新春と暮春と違っていれば、故人への哀悼と栄華の極みと、それぞれの状況も異なる。胡蝶巻の例には、他の巻とは違った意味が持たされている。それを異質と切り捨てるのではなく、別の方向から検討することで、幻巻と早蕨巻をも読み直せるのではないか。

では、胡蝶巻については後で再び考えることとし、幻巻の始まりに戻る。

春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなどすれど、御心地なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内にのみおはします。

（四巻、幻、五二一頁）

この冒頭部の「春の光」について倉林正次氏は、

源氏は新年の「春の光」を仰いで、同時に春の光に象徴される紫上を思ったのである。だから、明るい新春の光が、源氏にとってはかえって「悲しさのあらたまるべくもあらぬ」心境を招いたのである。

とされ、「歳事反拒の叙情」をもたらすものの一つととらえられた。[2]

またこの流れを受けつつ、『新編全集』頭注では、

「光」と次の「くれまどひ」が対照的。春に象徴される紫の上を喪った源氏は、春の陽光の中で暗く惑うばかりである。

のように、「くれまどひ」という言葉を導き出す役割も指摘されている。[3] いずれにしても幻巻の冒頭については、自然の在り方と光源

氏の心情との対比に重点を置く読み方がなされているといえる。しかし、亡き紫の上を哀傷するというような、人物の心情を象徴する以外にも、「春の光」という言葉で巻が語り出される必然性はないのだろうか。幻巻と関連が深いとされている早蕨巻についてはどうであるのかを併せて考えたい。

早蕨巻の冒頭も、亡き人を偲びつつ迎える新春から始まっている。故大君を思う宇治の中の君の心中が語られる。

薮しわかねば、春の光を見たまふにつけても、いかでかくながらへにける月日ならむと、夢のやうにのみおぼえたまふ。

（五巻、早蕨、三四五頁）

ここでも新春の訪れを「春の光」と表している。幻巻と同じ冒頭表現であることは、玉上琢彌氏の『源氏物語評釈』が初めに指摘された。[4] それを受け、吉井美弥子氏は冒頭近くに引き歌が集中していることに注目され、そこから、

早蕨巻が「源氏物語内源氏取り」とも言える方法によって、表現面から幻巻の世界を重ねあわせ、大君があたかも幻巻の紫上のごとく物語にとって重要な存在であるかのように見せながら、巻頭の引歌表現によってそれを逆転させ、また内容面での落差をあらわにしてしまうありかたを有している

と結論付けられる。[5] さらに小町谷照彦氏は、吉井氏の論に検討を加えた上で、この巻全体としても引き歌が多いことを考察され、「表現媒体としての完成度が高い」と述べられる。[6] 幻巻と異なっている点は、早蕨巻の表現は独自の方法によるものとして理解されていることである。早蕨巻に「物語取り」などの方法が認められるのならば、その前提となる幻巻にも何らかの表現方法があるということになる。しかも、幻巻の場合は引き歌の数の多さ等とは別の、幻巻独自のものがあるはずである。

ところで、早蕨巻冒頭の引き歌による表現である「薮しわかねば」に関して、玉上氏の『源氏物語評釈』では、

この場合には、『古今集』の詞書に関連した裏の意味（天皇の御恵みが広大無辺といった意味）はない。

と注される。[7] この和歌は、

礒神の並松が、宮仕へもせで、礒神と言ふ所に籠り侍けるを、俄に冠賜れりければ、喜び言ひ遣はすとて、よみて、遣はしける　布留今道

日のひかり籔し分かねば礒の神ふりにしさとに花も咲きけり

（『古今和歌集』雑上・八七〇）[8]

というもので、「日のひかり」のように、日光等を天皇やその恩恵の意味で詠む和歌は、『万葉集』や『古今集』を始めとして古くから見られる。果たして早蕨巻では玉上氏の説かれるように「裏の意

味はない」のだろうか。和歌表現の伝統において、「春の光」も同じような意味を持っている可能性があるとすれば、物語の読み方も変わることになる。

このように考えると、幻巻の冒頭に古注以来引き歌として指摘されている『後撰集』の和歌があることが注目される。続いて幻巻の引き歌表現を中心に考察を加えることとしたい。

二、

和歌に詠まれる「春の光」には、どのような意味があるのだろうか。

幻巻冒頭に『河海抄』が引き歌として指摘[9]する和歌には、物語の本文と同じように「春の光」という言葉が詠まれている。

おなじ御時、御厨子所にさぶらひけるころ、沈めるよしをなげきて、御覧ぜさせよとおぼしくて、ある蔵人に贈りて侍ける十二首がうち　　みつね

いづことも春の光はわかなくにまだみよしのの山は雪ふる

（『後撰和歌集』春上・一九[10]）

詞書によると、沈んでいることを嘆いての和歌、つまり引き立てがないため天皇の恩恵に浴さないことを訴える和歌と解釈されている。幻巻の光源氏の心情とは異なり、人の死を悼むものではないので、物語と内容が重なっていないように見える。そのため「みよしのの山」の「雪」が景物として持ち出されていることに注意を集めたのだろうか。つまりこの和歌は早春の景を表すための引き歌としてのみ理解され、これまでさほど注目されることがなかったように思われる。しかし、そのままでは注釈の意図を正しく読み取ったことにはならないだろう。これは「春の光」という言葉が詠まれ、しかも「雪」と組み合わせられている和歌の、勅撰集での初めての例でもある。同じ表現をとるものは、勅撰八代集でもう一例ある。

鶯を　　菅贈太政大臣

谷ふかみ春のひかりのをそければ雪につゝめる鶯の声

（『新古今和歌集』雑上・一四四一[11]）

『新古今和歌集全評釈[12]』では、この和歌に「参考」として、「鶏既鳴兮忠臣待レ旦　鶯未レ出兮遺賢在レ谷」との『和漢朗詠集』（上・春・鶯・六三・鳳為王賦[13]）の句を挙げる。ついで、「古来、この歌については、寓意性の有無が論じられている。」とし、古注等の意見に触れたのちに、

もともとどのような動機で詠まれた作であるかはわからない。さらにいえば、本当に道真の作であるかどうかも疑問である。が、この歌が道真の歌として、しかも雑歌の扱いを受けている以上、新古今時代の人々がこれを寓する所ある歌として読もう

としたことは、ほぼ確かなのではないか。

とされる。[14] いつ頃からこの和歌が流布していたかは不明であるので、『源氏物語』との関連を言うのには注意が必要ではある。菅原道真の作とされたことと、『和漢朗詠集』の句が参考とされることとは表裏一体で、享受の過程でどちらが先とはいえないであろうが、注目すべきことである。「春の光」による表現がとられる和歌からは、叙景だけでなく、身の栄達や不遇に関する意味も読み取るべきだろう。

更に、「春の光」という形はとらずに、「春」と「光」を詠んだ和歌でも同じ特徴が見られる。「雪」も一緒に詠まれていて早い例では、次のものがある。

二条后の、春宮の御息所と聞えける時、正月三日御前に召して、仰せ言ある間に、日は照りながら、雪の頭に降り掛りけるを、よませ給ける　文屋康秀

春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき

（『古今和歌集』春上・八）

「春の日の光」は春宮を指すとされている。この「雪」は、前の例と少し異なり、沈む我が身を嘆くものではない。春の日に照らされるまで長く待つうちに頭が雪になってしまった、つまり白髪になったというものである。それでも、「雪」は「光」である高貴なものとの対照を表すことには違いがない。後藤祥子氏は「初春のめでたさを象徴する陽光の文学的先蹤」としてこの和歌を挙げられるが、[15] これまでの例から見ても、「春の光」は新春の景と限定しない方がよいだろう。

「春」と「光」の組み合わせの和歌としては、長歌をのぞけば『古今集』には他に、

桜の花の散るを、よめる　紀友則

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

（『古今和歌集』春下・八四）

時なりける人の、俄に時なくなりて嘆くを見て、自らの、嘆きもなく、喜びもなきことを思て、よめる　清原深養父

光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思もなし

（『古今和歌集』雑下・九六七）

の二首があるだけである。友則歌は詞書を見る限り、これまで見た意味についていえば希薄であるが、深養父歌については、幻巻にとっても、光源氏の築いた世界にとっても大きな関わりを持つことになると思われるので、後で考察する。

これまで検討した「春」と「光」、更にそれらと対照される「雪」が詠まれていることで共通する『古今集』の康秀歌、『後撰集』の躬恒歌、『新古今集』の道真歌の三首について言えば、「光」は恩恵

や栄華を表すもので、「雪」はそれと対照的な沈める我が身を示す。「春の光」は通常、沈む身に当たることのないものとして表わされている。「光」が当たらないという形をとることから、これは栄達とかけはなれた立場を嘆くことを詠むための様式としてあったといえる。従って『河海抄』が『後撰集』の躬恒歌を指摘したのは、新春の景としてよりも、この意味によるものであることを考えるべきだろう。ただ、当然ながら幻巻の光源氏自らが栄達しないことを嘆くことはない。幻巻とこの和歌を重ねることについては、もう少し考える必要がある。

また、『新古今集』が編まれた時代の詠歌について言えば、藤原俊成や定家などにもこの様式による数首の詠がある。より明確なものを挙げると、(16)

おなじころ、西山なる所にこもりゐたるに、正月つかさめしなど過ぎて雪のふりたる朝に、人のとぶらひたる返事のついでに

おもひやれ春の光も照しこぬ深山の里の雪の深さを

（『長秋詠藻』下・雑歌・三六四）

二月　花中鶯ある所人家あり

里わかぬ春の光をしりがほにやどを尋ねてきゐる鶯

（『拾遺愚草』中・女御入内御屏風歌　文治五年十二月・一八八三）

雑廿首

くらゐ山ふもとの雪にうづもれて春のひかりをまつぞ久しき

（『拾遺愚草員外』堀河題略之・七六九）

などである。従って、「春」と「光」、特に「春の光」という形をとる和歌の中には、これまで見たような意味が認められていたといえる。『万葉集』のような古い歌集には、天皇の威光として「光」を詠むことはあっても、「春の光」や、「春」と「光」によってこのような意味で詠む和歌は見られない。古い和歌からあった様式ではないのなら、平安の始めごろにこの表現が定着するようになった要因には何があったのだろうか。和歌における「春の光」による表現方法をもたらしたものは何か、また、先に触れた胡蝶巻の「春の光」について考察するため、漢詩文を中心に検討を試みる。

三、

和歌では「春の光」と詠まれていたものを検討したが、漢詩文では「春光」という言葉を、それにあたるものとして考えることとする。「春光」が持つ意味と「春の光」との間に何らかの繋がりはないだろうか。

『文選』「遊覧」の沈休文の作に、「鍾山詩、應西陽王教一首　五

言」がある。[17] その五連あるうちの第三連に、「春光」がみられる。

即事既多美　事に即いては既に美多く
臨眺殊復奇　臨み眺めも殊に復た奇なり
南瞻儲胥觀　南のかた儲胥の觀を瞻
西望昆明池　西のかた昆明の池を望む
山中咸可悦　山中　咸悦ぶ可く
賞逐四時移　賞は四時を逐ひて移る
春光發龍首　春光は龍の首に發き
秋風生桂枝其三　秋風は桂の枝に生る（其の三）

この詩は鍾山を仙境に見立て、西陽王につき従って遊んだ折のことを讃えたものである。内容は、洛陽の周囲の山々を「靈山」としながら、都の北に位置する鍾山へと導き、その様を神仙の住む「三山」になぞらえる。「結架」して禅定を得ることもでき、また「五薬」や「三芝」を求めるにもふさわしい所とする。第三連では眺めが優れることを中心とするが、「四時」を表すのに、「秋風」と並べて「春光」が鍾山の頂にきらめく様を言う。仙境を照らし、西陽王と共にこれを浴びるというのが、詩語「春光」の根幹をなすといえるだろう。これが日本の漢詩文ではどのように用いられていったのだろうか。

日本における漢文では、『本朝文粋』に一つ「春光」が見出せる。[18]

仲春二月の野遊を表す序文である。

春の日の野遊　和漢意に任す　橘在列

それ上年の候、仲春の天、槐林の深き窓を出でて、松樹の遠地を望む。所謂好客の群雄なり。時に嵩岳の西脚、洛水の東頭、野煙の春の光に嘯きて、各一句を吟じ、山霞の晩の色を酌みて、皆数盃に酔へり。松根に倚りて腰を摩れば、千年の翠手に満てり。梅花を折りて首に挿めば、二月の雪衣に落つ。これ蓋し吾が朝の風俗、子日の嘉会なり。志の之く所、盍ぞ翰墨を命ぜざらんと爾云ふ。　（巻十一、和歌序・三五〇）

ここでの「春光」も野遊の中で目にした、もやの立ちこめる春の景である。子の日は日本の風俗であると文章中でも断りがあるが、めでたい集まりを野で行うのは『文選』を受けてのことであろう。野山に遊ぶ目的、季節を二月と明記するなど、『文選』と多少異なる点があるのは、日本においても「春光」が根付く際に、前節で考察した和歌の表現との行き来があった可能性がないだろうか。この文章にも「雪」が見えるのも、和歌でのあり方と結びつくように思われる。もっとも、「雪」はここでは不遇を嘆く意味ではなく、梅の花の花びらの散りかかる様を喩えるものである。「倚松根摩腰　千年之翠満手　折梅花挿頭　二月之雪落衣」は『和漢朗詠集』（上・春・子日・三〇）[19] にも採られていて、よく知られたものであったよ

うである。

また日本の漢詩にも、「春光」という語は用いられている。「春の光」を詠んだ和歌で、道真歌とされていたものがあったが、『菅家文草』にも三例がみられる。[20] そのうちの一つを検討しよう。

四四〇　早春侍レ宴、同賦二殿前梅花一、應レ製。

非紅非紫綻春光　紅に非ず紫に非ず　春光に綻ぶ
天素從來奉玉皇　天素從來　玉皇に奉る
羊角風猶頒曉氣　羊角の風は　なほし曉氣を頒つ
鵝毛雪剩假寒粧　鵝毛の雪は　剩さへ寒粧を假す
不容粉妓偸看取　粉の妓の偸に看取るを容さず
應叱黄鸝戲踏傷　黄なる鸝の戲に踏み傷ることを叱ぶならむ
請莫多憐梅一樹　請ふらくは　多く憐れぶことな　梅一樹
色青松竹立花傍　色青くして松竹　花の傍に立てり

（巻六・四五〇～一頁）

清涼殿の白梅が「春光」によって染められ、雪によってさらに化粧したようだと讃える詩である。梅は仙人にたとえられることがあるが、「玉皇」すなわち天帝に奉仕してきたとし、緑を失わない松や竹と配するなど、仙境としての世界を描いている。早春という季節に、天皇の恩恵を表すことが和歌における「春の光」と共通している。ここでも「雪」は和歌と異なる意味であるものの、忘れられてはいない。あと二例はいずれも隠遁する道士を照らす光としてのものである。

このようにして詩語「春光」は日本にもたらされ、歌語「春の光」と交流しつつ定着していったと思われる。胡蝶巻で六条院の栄華を「春の光」と表したのは、漢籍での意味をほぼそのままに残したものであろう。そのため幻巻や早蕨巻とは相いれないように見えたが、胡蝶巻こそが『源氏物語』における「春の光」を方向づけていると考えたい。

田中幹子氏は、『源氏物語』の胡蝶巻は、詩序による「仙境表現」がなされていることを詳細に論じられ、「六条院の春の庭は、王朝人が想像し得る最高に華やかな場であった」とされる。そして、

　天皇ではない光源氏の私邸での私宴に対して、天皇或いは上皇主催の宴の常套的賛辞である仙境の喩えが用いられていることが、重みを持つのである。

と胡蝶巻を位置付けられる。[21] その胡蝶巻にあって、いわば「仙境の喩え」の一つとも言える「春の光」が、どのようにして幻巻や早蕨巻に受け継がれてゆくのであろうか。

四、

これまでの考察で、漢籍からもたらされた「春光」と、和歌から

生まれた「春の光」との、二つの流れが『源氏物語』に見られることが明らかになってきた。漢籍にあった仙境や俗世からの隠遁が、和歌においては、栄達に見放された不遇と同一視されるようになっていったのだろうか。そして、その中で「雪」が不遇をいう役割を担うようになった。

物語にも、「春の光」と表裏をなす、不遇を示す「雪」が語られている。まず早蕨の場合から検討してみよう。その直前の総角巻の巻末近く、

年の暮れがたには、かからぬ所だに、空のけしき例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪にうちながめつつ明かし暮らしたまふ心地、尽きせず夢のやうなり。（五巻、総角、三三九頁）

とある。死別後の月日の経過にふれ、それを「夢のやう」に感ずる点は、総角巻末と、続く早蕨巻頭とは照応している。そして、都に対しての宇治は、やはり「雪」に降り込められる所であった。

幻巻の前の、御法巻末も同じような特徴が見える。

今日やとのみ、わが身も心づかひせられたまふをり多かるを、はかなくてつもりにけるも、夢の心地のみす。（四巻、御法、五一八頁）

幻と早蕨とは、巻頭が照応するだけでなく、そこに至る直前の巻末近くも照応していることになる。

また、「雪」について言えば、幻巻に入ってから、光源氏が紫の上を回想する条は、重要な意味があると思われる。

入道の宮の渡りはじめたまへりしほど、そのをりはしも、色にはさらに出だしたまはざりしかど、事にふれつつ、あぢきなのわざやと思ひたまへりし気色のあはれなりし中にも、雪降りたりし暁に立ちやすらひて、わが身も冷え入るやうにおぼえて、空のけしきはげしかりしに、いとなつかしうおいらかなるものから、袖のいたう泣き濡らしたまへりけるをひき隠し、せめて紛らはしたまへりしほどの用意などを、夜もすがら、夢にても、またはいかならむ世にかと思しつづけらる。曙にしも、曹司に下るる女房なるべし、「いみじうも積もりにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる、ただそのをりの心地するに、御かたはらのさびしきも、いふ方なく悲し。

うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひの外になほぞふるほど

（四巻、幻、五二三～四頁）

夢にふれるなど、御法の巻末とも対応している。また幻巻や早蕨巻の新春の景は、「雪」と組み合わせるという必要から来るものらしいこともうかがえる。だが、ここで注目したいのは、不遇の「雪」の中に追いやられたのは、紫の上であったことである。胡蝶巻では春の町の女主人として中宮とも応酬できた立場であった。それが女

三宮によって対に追いやられ、「雪」の夜に袖を濡らすこととなっている。「二月の十余日」（四巻、若菜上、六一頁）から三日目といえば、春の盛りであるはずである。その季節の春の町に降る雪は、紫の上が「春の光」のただ中から遠ざけられたことを象徴している。そして同時に、六条院そのものも、「いつも春の光を籠めたまへる大殿」（三巻、胡蝶、一六九頁）から姿を変えてゆくのである。

二節で取り上げた『古今集』深養父歌と物語との関連について、再び考えることとしよう。深養父歌は言うまでもなく、女三宮の光源氏への応答の元歌として知られる和歌である。

閼伽の花の夕映えしていとおもしろく見ゆれば、「春に心寄せたりし人なくて、花の色もすさまじくのみ見なさるるを、仏の御飾りにてこそ見るべかりけれ」とのたまひて、「対の前の山吹こそなほ世に見えぬ花のさまなれ。房の大きさなどよ。品高くなどはおきてざりける花にやあらん、はなやかににぎはしき方はいとおもしろきものになんありける。植ゑし人なき春とも知らず顔にて常よりもにほひ重ねたるこそあはれにはべれ」とのたまふ。御答へに、「谷には春も」と何心もなく聞こえたまふを、言しもこそあれ、心憂くもと思さるるにつけても、

（四巻、幻、五三一～二頁）

山吹は、胡蝶巻の船楽の折にも、その素晴らしさが讃えられていた。それをよすがに紫の上を偲ぼうとする光源氏の期待は裏切られる。従来、女三宮のこの言葉は、光源氏への共感に欠けることなど、心情面への痛手の大きさが言われてきている。しかし、雪の日の紫の上の回想を踏まえた上でのこの答えの出現は、光源氏の心情にとどまらず、六条院世界にも衝撃を与えることになる。女三宮は、亡き紫の上に代わって春の大殿に住むにもかかわらず、「春の光」に満ちた春の町の女主人を継承することを拒んだことになる。さらには六条院が仙境であり続け、胡蝶巻の栄華を保つことも否定するとよめる。

胡蝶巻で仙境として「春の光」に満ちていた六条院は、幻巻の巻頭ではその残照を偲ぶのみとなっていた。さらに「光隠れたまひにし後」（五巻、匂兵部卿、一七頁）の早蕨では、確たる「春の光」はもはや無く、雪に埋もれる宇治から都を望むに止まることになる。

結び

『源氏物語』における「春の光」を、歌語としての「春の光」と詩語「春光」の両方を受け継ぐものとして考え、仙境として描かれる六条院の栄華と、それが失われてゆく様とを追うことを試みた。

和歌の表現では、天皇を光にたとえるという、古くからの伝統が、「春の光」という形をとることによって独自の方法を持つようにな

ったといえる。一方、漢籍で仙境を表す言葉であった「春光」も、日本にもたらされてから歌語「春の光」と相互に関わりながら定着していったと思われ、中国とは少々異なった用いられ方をするようになっていった。

物語での表現のあり方を問うことを通して、歌語と詩語の生成に迫ることが可能になることもあるのではないだろうか。

注

（1）本文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集　源氏物語』（小学館、一九九六年。）により、以下巻名、巻数、頁数のみを記す。なお、引用文中に付した傍線はすべて筆者による。

（2）倉林正次「源氏物語「幻巻」の歳事構想（上）―歳事文学試論―」（『国学院雑誌』一九八八年一二月。）

（3）前掲『新編全集』四巻五二一頁頭注。

なお、この冒頭部において、光源氏が起居するのが六条院なのか二条院なのかという問題については、待井新一「源氏物語幻の巻の解釈―二条院か六条院か―」（『国語と国文学』一九六二年一二月）以来考えの分かれるところである。光源氏が築き上げた世界である六条院と、紫の上を偲ぶよすがのある二条院とが、ここではあえて重ねられていると考えられないだろうか。

（4）玉上琢彌『源氏物語評釈　一一』（角川書店、一九六八年、二三～五頁。）

（5）吉井美弥子「早蕨巻の方法―巻頭表現を起点として―」（『中古文学論攷』六号、早稲田大学大学院中古文学研究会、一九八五年一〇月。）

（6）小町谷照彦「源氏物語第三部―「早蕨」の歌ことば表現を読む」（『国文学』一九八六年一一月。）

（7）前掲『源氏物語評釈　一一』二三頁。

（8）小島憲之・新井栄蔵校注『新日本古典文学大系　古今和歌集』（岩波書店、一九八九年、二六三頁。）以降、八代集は新大系により、巻名と国歌大観番号を付すこととする。なお、和歌の検索はすべて『新編国歌大観』（角川書店）による。

（9）玉上琢彌編　山本利達・石田穣二校訂『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年、五二二頁。）

（10）片桐洋一校注『新日本古典文学大系　後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年、一〇頁。）

（11）田中裕・赤瀬信吾校注『新日本古典文学大系　新古今和歌集』（岩波書店、一九九二年、四一九頁。）

（12）久保田淳『新古今和歌集全評釈　七』（講談社、一九七七年、二四～五頁。）

（13）川口久雄・志田延義校注『日本古典文学大系　和漢朗詠集　梁塵秘抄』（岩波書店、一九六五年、六三頁。）

（14）注（12）に同じ。

（15）後藤祥子「哀傷の四季」（秋山虔・木村正中・清水好子編『講座源氏物語の世界　七』有斐閣、一九八二年五月。）

（16）私家集の本文は『新編国歌大観　三』（角川書店、一九八五年。）によった。

なお、藤原定家の詠歌と幻巻との関連については、清水婦久子「源氏物語の和歌―風景と人物―」（『和歌と物語　和歌文学論集3』風間

書房、一九九三年九月。）などの論考がある。

（17）本文中に引用できなかった他の連は次の通りである。

靈山紀地徳　　靈山は地徳を紀し
地險資嶽靈　　地險は嶽靈に資る
終南表秦觀　　終南は秦觀を表し
少室邇王城　　少室は王城に邇し
翠鳳翔淮海　　翠鳳　淮海に翔り
衿帶繞神坰　　衿帶　神坰を繞れり
北阜何其峻　　北阜　何ぞ其れ峻しき
林薄杳葱青其一　　林薄　杳として葱青たり（其の一）

發地多奇嶺　　地より發りて　奇嶺　多く
干雲非一狀　　雲を干すこと　一狀に非ず
合沓共隱天　　合沓として共に天を隱し
參差互相望　　參差として互に相望む
鬱律構丹巘　　鬱律として丹き巘を構へ
峻嶒起青嶂　　峻嶒として青き嶂を起す
勢隨九疑高　　勢ひは九疑に隨ひて高く
氣與三山壯其二　　氣は三山と與に壯なり（其の二）

多値息心侶　　多　心を息むる侶に値ひ
結架山之足　　架を山の足に結べり
八解鳴瀾流　　八解は瀾の流れに鳴り
四禪隱嚴曲　　四禪は嚴の曲に隱る
窈冥終不見　　窈冥として終に見えざるも
蕭條無可欲　　蕭條として欲す可き無し
所願從之遊　　願ふ所は之に從ひて遊ばんこと
寸心於此足其四　　寸心　此に於て足りなん（其の四）

君王挺逸趣　　君王　逸趣を挺で
羽旆臨崇基　　羽旆　崇基に臨めり
白雲隨玉趾　　白雲は玉なす趾に隨ひ
青霞雜桂旗　　青霞は桂の旗に雜る
淹留訪五藥　　淹留して五藥を訪ひ
顧步佇三芝　　顧步して三芝を佇つ
於焉仰鑣駕　　於焉に鑣駕を仰ぐ
歲暮以爲期其五　　歲暮　以て期と爲さん（其の五）

花房英樹『全釈漢文大系　文選（詩騷編）三』（集英社、一九七四年、三二三～八頁。）によったが、表記を改めたところがある。このほかの漢籍の「春光」の用例としては管見では、早いもので『玉臺新詠』など、六朝から晩唐ごろまでで十数例見られる。その多くは「桃李」などと合わせて春の盛りをうたうもののようである。漢籍の「春光」の詳細については、別の機会に改めて考えたい。

（18）大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『新日本古典文学大系　本朝文粋』（岩波書店、一九九二年、六七頁。原文は三二三～四頁にあり。）

（19）前掲『和漢朗詠集』五四頁。

（20）川口久雄校注『日本古典文学大系　菅家文草　菅家後集』（岩波書店、一九六六年。）本文に挙げられなかった二例は次の通りである。いずれも隠遁する道士を照らす光である。

三一九　野庄。

適逢知意翫春光　　適知意に逢ひて　春光を翫ぶ

緑柳紅櫻繞小廊　緑柳紅櫻　小廊を繞る
不見家中他事業　家中　他の事業を見ず
計將道士晩駈羊　計將らくは　道士　晩に羊を駈けしむることを
（巻四・僧房屏風圖・三五五頁）

四六七　海上春意。
蹉跎鬢雪與心灰　蹉跎たり　鬢雪と心灰と
不覺春光何處來　覺えず　春光何れの處よりか來れる
染筆支頤閑計會　筆を染め頤を支へて　閑に計會す
山花遙向浪花開　山花遙に浪花に向ひて開く
（巻六・近院山水障子詩・四六六頁）

（21）田中幹子「源氏物語「胡蝶」の巻の仙境表現―本朝文粋巻十所収詩序との関わりについて―」（『伝承文学研究』伝承文学研究会、一九九七年一月。）

他にも六条院に仙境としての性格があることについては、小林正明「蓬莱の島と六条院の庭園」（『鶴見大学紀要　第一部　国語・国文学篇』二四号、一九八七年三月。）や、横井孝「源氏物語と作庭秘伝書―「六条院」の基底―」（王朝物語研究会編『研究講座　源氏物語の視界4　六条院の内と外』新典社、一九九七年五月。初出は『静岡大学教育学部研究報告』三八、一九八八年三月。）などの論考がある。